

# 七 明治三十六年史

## (一) 寒 稽 古

本年の寒稽古は二月十二日に芽出度終つたが、最終日には、例の如く雑煮の御馳走あり、或は十杯を平げ、或は十數杯にして漸く味の判つたといふ健啖家もあつて賑やかであつた。その元氣を以つて十五日午後より皆勤賞授與式を開き、先づ數番の亂取ありしが、その中平賀氏と山田氏、大塚氏と薄氏、森本氏と福田氏等の取組は、見物人をして思はず手に汗を握らしむるものがあつた。それより左の五人掛勝負に移る。小泉氏と中村氏とは各五人を抜き、吉武氏と大中氏とは各四人を抜き、五人目に引分となつた。



初段	大 中 圭 介	初段	中 村 愛 作
〇〇〇〇×	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
×	・ 篠 田 信 二 ・ 神 吉 英 三 ・ 大 塚 莊 亮 ・ 海 江 田 平 八 郎 ・ 向 山 昌 治	×	・ 福 田 龍 ・ 平 賀 恒 次 郎 ・ 平 野 重 三 ・ 山 田 又 司 ・ 小 泉 浩

## (二) 第十一回柔道大會

三月十五日に第十一回の大會が行はれた。柔道部は此頃に至り、旭の昇るが如き勢にて、有段有級者合して五十名にも達し、此等が皆外敵に向ふことなれば、講道館を始め、諸學校各警察署よりの來賓も多く、隨つて道場も狭ければとて、本年は當時の新講堂の二階に六十疊の疊を敷き、其兩側に椅子を並べて會場に充て、來賓席塾生席を設け、其他仕度場下足番等用意萬端至れり盡せりといふべきであつた。

然るに當日は折悪しく天候急變して、早朝より雨さへ降り出したる爲め、開始時間を延ばして九時より始むるの止むなきに至り、正午迄に無級者の取組二十四組を了り、午後更に有級者の對外試合より有段者に移つた。今左に記録に依りて當日の勝負の模様を書き記さん。

先づ舞臺に現はれたるは、何れも優しき木村利太郎氏に杉山龍之助氏。木村が平素の練習や優りけん、大外刈と大外腰を以て美事に勝を制した。(二)田中豊三氏對三代川陸質郎氏。袈裟固と四方固、奇麗に二本取りて田中の勝。(三)藤井茂太郎氏と岡田實氏。藤井如何に技術に長ずるとも、敵はステキな大男、施すに術なくして遂に引分となる。(四)岩下勘七

郎氏對永瀧松之輔氏。永瀧五分の業ありしも、九分二十五秒の長きに互りたれば遂に引分。(五)人見惇氏と秋山修一氏は引分となり、(六)富田孝夫氏と川島榮吉氏亦引分となる。(七)福田子之助對宗澤二郎氏。福田大外刈にて倒し、元氣頗る旺盛なりしが、七分十二秒の後遂に一本勝負の聲かゝりて、そのまゝ福田の勝。(八)中村金太郎氏對土屋安氏。左ギツチヨの中村先づ足拂にて業を取り、又腰業を試むる事數回にして土屋頗る苦戦の體なり、遂に左腰残りてよろめく土屋の足を美事に拂ひ、名譽は天晴金太郎の手に歸した。(九)小山萬吾氏對田村市郎氏は、袈裟固にて小山の勝。(一〇)日野達氏對和田秀治氏。猛烈なる仕合なりしが、日野日頃の蠻勇は袈裟固横四方と二本迄も功を奏した。(一一)中田忠治氏對中村勝治氏。中田は中々の業士にて、先づ猛烈なる足拂を與へ、續いて大外刈にて中村を倒す。(一二)西川龜吉氏對田中孝氏袈裟固にて西川の勝。(一三)佐瀬武雄氏對櫻村隆氏。佐瀬元氣旺盛袈裟固にて二本取る。(一四)松本勝太郎氏對武子源一郎氏は引分。(一五)山中福之助氏對伊藤一郎氏。立上るや否や山中卷込に敵を倒し、一本勝負となりて山中の勝。(一六)川田惣太郎氏對古橋盛男氏。古橋腰を入れしも、巧に之を返されて敗を取る。(一七)安川鴻藏氏對青木鐵造氏。横捨身にて安川の勝。(一八)渡邊茂氏對石渡泰三郎氏。體落にて渡邊の勝。(一九)遠口直次郎氏對高見澤廣作氏。如何にやしけん高見澤足部に負傷したれば、一時中止。(二〇)松永干城氏對中村壯吉氏。美事なる巴投にて松永の勝。(二一)林田峰次氏對村瀬末一氏。元氣と滑稽にて有名なる林田、大外刈と同時に袈裟固にて村瀬を參らせ、又大内刈にて大勝。(二二)瀬川巖氏對時任彦一氏。瀬川の背負投危機一髪と云ふ有様にて満場爲に喝采す。暫くにして時任が足拂功を奏したりしが、二度目の足拂は返されて互格となり、此處を先途と争ひしが、大外刈にて時任遂に敗る。(二三)大藪孝一氏對多田源二郎氏何れも孰中有數の大男、大藪巴投を試みて中々優勢なりしが裸締に變つて一本取り、多田無念なりとや思ひけん、大外刈にて美事に仇を報じ、更に暫し揉み合ひたる後、袈裟に固めて最後に大藪の勝となる、實に午前中の大試合であつた。(二四)先刻の負傷の爲め一時中止してゐた遠口と高見澤、遂に引分となる、時に零時八分。茲に午前中の優勝者として擧げ

られたる中村金太郎氏に、故幹事島津理左衛門氏記念賞品を授け、正午の休憩に入る。審判は中村、大中、藤崎、吉武、高橋、金澤の諸氏であつた。

午後の戦士は一人として有級者ならざるなく、而かも對外試合の事なれば、何時の間にやら犇々と詰め掛け來れる見物人も多く、一時より山下師範審判の下に、再び勝負の幕が開かれた。

備考 (大)は東京帝國大學、(早)は早稻田大學、(商)は高等商業學校、(高)は第一高等學校、(美)は美術學校、(師)は高等師範學校、(外)は外國語學校、(佛)は佛教大學、(獨)は獨逸學協會學校、(講)は講道館、(警)は警視廳、(區名)は各警察署

(二五)× 内田 泰造(赤坂)

福原 茂樹

(三〇) 入佐彌兵衛(警)

小倉 丹治

(三五)× 山上 榮一(高)

薄 宗太郎

(二六)× 小笠原 精太郎(下谷)

齋藤 衡平

(三一) 富永袈婆熊(警)

菅井 與平

(三六) 大和多 鶴之助(早)

森本利三郎

(二七) 平田 榮三(美)

神吉 英三

(三二) 横田 慎次(師)

加藤 多助

(三七) 荻原幸之丞(赤坂)

大塚 莊亮

(二八) 桐原 吉藏(芝)

中野 榮三郎

(三三) 千秋穂三郎(師)

黒江 潮

(三八)× 須山 智藏(佛)

高島 一貫

(二九) 松田 衛(外)

上杉彌一郎

(三四)× 吉増 (外)

井本 茂一

(三九) 秀島 寛融(佛)

吉田 兵藏

(四〇) 森 納 郎 (講)

中島重次郎

(四一) 岡 本 俊 (講)

濱田隆一

(四二) 丹 羽 精 三 (講)

村上惣治

(四三) 木 原 (講)

渡邊源吾

(四四) 川 東 (講)

瀨良是助

(四五) 岡 本 俊 (講)

小野秀一

(四六) 坪 田 甲 三 (講)

西原久

以下有段者

(六〇) 金 丸 惇 一 (警)

金澤冬三郎

(四七) 戶 澤 民 十 郎 (大)

橋本玉次郎

(四八) 增 田 (講)

篠田信二

(四九) 谷 鑛 馬 (本郷)

海江田平八郎

(五〇) 嶺 山 田 又 司 (講)

丸野豊美

(五一) 秋 山 孝 之 輔

中島惟恭(下谷)

(五二) 松 岡 正 男

半田祐三郎(芝)

(五三) 盛 田 保 三

(六一) 福 永 吉 雄 (高)

佐野甚之助

(五四) 龍 喜 久 (日本橋)

平野重三

(五五) 小 野 寛 次 郎 (講)

田中新太郎(淺草)

(五六) 松 本 (講)

西岡熊吉(?)

(五七) 森 安 三 郎 (大)

濱田精藏

(五八) 岡 田 宇 一 (神田)

向山昌治

(五九) 篠 原 惠 作 (早)

小泉浩

(六二) 山 田 敏 行 (早)

五月女芳三郎

二段 八 谷 護(講)  
(六三)×

藤 崎 達 磨

右の中(二五)福原體落にて分を取り、内田(赤坂)亦押へて分あり、五分々々となりて、一本勝負の聲かゝりしが、遂に引分。(二六)小笠原(下谷)相手の小兵を侮りて勝を一氣に制せんとする者の如く、頻に蠻勇を振廻したるも、これといふ技もなく、齋藤巧に避けて引分。(二七)神吉は右手の指に負傷し、平田(美)少しく業ありたれど、遂に一本勝負となりて後、神吉の勝。(二八)桐原(芝)は八字鬚の老骨、中野は體こそ大きけれ、未だ二八の紅顔なり、戦ふこと數分にして中野首を絞められしが、暫しの後桐原一本を取られ、又足拂横捨身の合業にて中野の勝となる。(二九)何れも似寄りの短身肥滿、上杉毎に攻勢を取りしが、松田(外)の袈裟固に業を取られたれば、少しく怒氣を含んで無二無三奮闘し首絞に一本を取り、裏投又功を奏して凱歌を揚ぐ。(三〇)一本勝負の聲ありて後小倉拂腰にて入佐(警)を倒し、そのまゝ押へ込む。(三一)菅井見事なる大外刈にて二本とも勝。(三二)加藤に分あり、後又足拂に分あり合して一本、戦ふこと十分、一本勝負に了る。(三三)黒江先づ足拂にて取り、暫くにして千秋(師)は裏投に仇を報ぜしも、又足拂返しにて黒江の勝。(三四)吉増(外)、井本何れも必死と戦ひしが、力に優劣なかりしと見え、遂に引分となる。(三五)山上(高)は素晴らしき大男なりしが、奮闘數分勝負なし。(三六)森本の横捨身業ありしが、又大多和(早)の背負投も鋭く、觀客爲めに血を湧かす。一本勝負の聲かゝりて、森本大内刈にて業ありしも、大多和の巧なる左腰にて遂に破らる。(三七)大兵に小兵、荻原(赤坂)は押込大塚は背負投、何れも得意を試みしが、皆無効に終り、最後に大塚の體落美事に敵を倒して滿場熱狂。(三八)高島立ち上りさま體落にて奇麗に一本、猶其他に業ありしも、須山(佛)引落にて取りたれば、五格にて退く。(三九)二本共四方固にて秀島(佛)の得る所となる。

此處で幼年組體操形第一種柔の形が演ぜられた。

向山昌治	西原久	濱田隆一	瀬良是助
平野重三	小野秀一	中島重次郎	村上惣治
中村壯吉	後藤績	松永干城	
渡邊茂	遠口直次郎	高見澤廣作	

可憐の少年七組十四人ぐると並んで、金澤初段の號令の下に、例に依りて機械を操る如き運動に、満堂の喝采暫し止まなかつた。

(四〇)森(講)屢々巴投を試みしが、中島巧に之を避け、互に相闘ふさま流石は幼年組よと、觀る者歎稱せざるはなかりしが、遂に背負投にて中島收る。(四一)濱田巴投にて岡本(講)を倒し、暫くにして腰投惜しき所にて残りしが、遂に一本勝負。(四二)村上體落にて勝。(四三)木原(講)は頗る活潑にして、奇麗なる取口なりしも、遂に渡邊の爲めに押込まれ、又足拂に倒る。(四四)瀬良足拂にて先づ勝ち、其後業ありしも遂に一本勝負。(四五)岡本(講)は前に濱田と戦ひて敗れたる者、死物狂ひに戦へど、小野亦能く應じて引分。(四六)幼年らしき奇麗なる仕合、西原背負投にて收らる。(四七)橋本大内刈にて取り、又大外刈にて戸澤(大)を倒しぬ、何時もながら橋本の業牙えたり。(四八)増田(講)と篠田氏は引分。(四九)谷(木郷)は有髯の丈夫、海江田は花の美少年、延暦元年の其昔須磨の浦邊の組打も、斯くやとばかり思はしめしが、事實は案に相違して、美少年は足拂にて老武者を倒し、又拂腰より卷込に移りて、適れの勝。(五〇)山田大外刈にて取り、更に横掛にて槓(講)を倒す。(五一)丸野(美)腰を入れしも、秋山が得意の返し功を奏し、續いて襟絞に敵の首を搔き取る。(五二)松岡襟絞にて落され、又巴投にて退く。

此の時初段金澤、高橋兩氏の五之形、初段中村、五月女兩氏の投之形、初段吉武、藤崎兩氏の勝負之形あり、孰れも其妙技を示した。

續いて(五三)盛田、半田(芝)の爲に四方に固めらる。(五四)龍(日本橋)横捨身にて業あり、平野頗る苦戦、合せ業にて一本取られしが、平野も左る者、大内刈にて互格の勢となり、又大外刈にて勝を制す。(五五)小野(講)大外刈返しにて田中(淺草)を倒し、又大外刈にて二本共勝。(五六)共に屈強の偉丈夫、西岡大外刈にて取られ、松本(講)亦四方固にやられしが、遂に襟絞にて西岡參る。(五七)濱田、森(大)の美事なる拂腰返にて負け。(五八)向山大内刈に業ありしも、襟絞にて岡田(神田)に一本取られ、又大内刈と襟絞にて取返し遂に引分。(五九)小泉は右膝に大なる腫物を生じ居りたれば、得意の拂腰も思ふに任せず、暫し戦へる間に一本勝負の聲かゝり、小泉袈裟固にて危かりしが、遂に篠原(早)の横捨身に投げらる。

これより有段者勝負に入る。(六〇)金丸(警)が最も得意の巴投には流石の金澤も敵し兼ねて、遂に敗を取る。(六一)佐野が得意の左腰今か〜と片唾を呑んで待ちたれど、福永(高)の内股も亦鋭く、遂に引分となる。(六二)山田(早)大腰にて業あり、互に奮闘せしが、五月女續けて跳腰を二本取る。(六三)八谷(講)は名高き二段、藤崎亦初段の古參なれば、中々に身の入りたる試合であつた。八谷は巴投に危かりしこと數回、藤崎亦小内刈に惱まされ遂に引分となる。

尚六組の有段者勝負ある筈なりしも、伊藤義保氏(本郷)、柳悦多氏(講)、山本欽作氏(本所)、伊藤徳五郎氏(講)、新井源水氏(獨)、河野威太郎氏(早)及び手島嶺太郎氏(早)等の不參の爲め、勝負は右にて終り、續いて有段者の亂取があつた。大中氏と本多氏、中村氏と吉武氏。前者は豫め言ひ合した如くであつたが、後者は壯快にして中村の跳腰、吉武の跳卷の如き、何れも觀衆の喝采を博した。其他豫定の六段山下義詔氏と五段富田常次郎氏の講道館古式の形、並に三段前田榮世氏の五人掛は、富田、前田兩氏都合に依り出席せられずして、之を見る能はざりしは遺憾であつた。

最後に優勝者に賞品を授與し、それより別室に於て來賓試合者及び有段者に晚餐を供して、今日の大會を了つた。



(三) 月次勝負

無級者の月次勝負は五月三十一日に、有級者月次勝負は六月十九日に行はれた。茲には有級者の勝負丈けを掲げる。

(一)	○ 村 上	(六)	○ 西 原	(二二)	○ 大 藪	(一六)	○ 黒 江	(二二)	○ 吉 田
(二)	○ 瀬 良	○ 瀬 川	○ 福 原	○ 福 原	○ 薄	○ 盛 田	○ 盛 田	○ 吉 田	○ 吉 田
(三)	× 中 村	○ 瀬 川	○ 福 原	○ 福 原	○ 薄	○ 盛 田	○ 盛 田	○ 吉 田	○ 吉 田
(四)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(五)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(六)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(七)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(八)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(九)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(一〇)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(一一)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(一二)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(一三)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(一四)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山
(一五)	○ 濱 田	○ 神 吉	○ 橋 本	○ 橋 本	○ 森 本	○ 秋 山	○ 秋 山	○ 向 山	○ 向 山

『右の中(三)中島——小野、花ならば未だ蕾の兩勇士、互に劣らじものをとて、朱をさす双頬逆立つ眉、挑み合ひける  
 其中に、小野巧に中島が左手を殺して裸絞見事に功を奏せしも、中島物々しやと立直り様、左大外落にて恨を報じ、共に陣にぞ引き返す。(五)濱田——西原、濱田左釣込腰に業ありしも、西原ナンノと立直り、大外刈返にて天晴れの手柄。  
 (七)瀬川——齋藤、勝ち誇りたる瀬川の鋭鋒を齋藤巧みにかいくぐり、横に薙いだる晴業は、衡平業と世に高し。(一〇)

中野——大藪、中野巴投見事なりしが、名も凄まじき大藪の、拂腰、大腰返に無慘の死をぞ遂げにけり。(二四)上杉——橋本、鶴林八道踏み荒したる加藤をも、取つて投げたる剛の者、橋本の玉三郎とは我事よ、いざ敵御座んなれと身構へたり。心得たりと越後の謙信、頭振り立て驅け向ふ。相戦ふこと八分十秒、橋本大外刈にて七分を得たるも、襟絞、跳腰に二本を取られ、流石の『のぼり龍』も降り龍とぞなりにけり。(一八)大塚——森本、孰れ劣らぬ業士と業士、虚々實々互に秘術を盡し合ふこと、十二分と三十五秒。審判官が引分の聲を名残に歸陣せり。(二〇)松岡——海江田、腹鼓音便々たる東北産の大爺に對するものは、風姿瀟洒たる南薩の紅顔兒、勝負如何にと見てあれば、海江田先づ大外腰にて一本を收め、喜色満面たる折しも、松岡が掛けたる浮腰見事に極まりて終に引分。(二四)小泉——向山、小泉如何に暴虎憑河の勇ありとも、相手は名に負ふ不倒翁、攻ること急なれば、守ること彌々堅く、九十九計は盡き果て、残る一計襟絞も、危く残して其功なく、陽炎稻妻水の月、姿は見へて手に入らず、引分とこそなりにけり。(二五)吉武——佐野、五尺七寸十九貫、雷名天下に隠れなき吉武吉雄見參せんと大音聲、此方も望む所よと靜づしんづと打ち出でたるは、これも名うての古兵もの、佐野の甚之助、五尺五寸十七貫、いいで勝負を決せんと仁王立にぞ突立ちたり。先づ吉武より横捨身を打ちしもきまらず、佐野の足拂も亦何等の功なく、何れを勝とも定め難き折しもあれ、吉武が掛けし跳腰に軍配上りて、今日の關は吉武とこそ定まりぬ。」

#### (四) 部長の更迭 (青木氏就任)

柔道部の創立以來、久しく部長の任に在つて、今日の基礎を築き上げたる塾の大先輩濱野定四郎氏は、老體の上に劍道部の部長をも兼ね來れる所、此度其勢に堪へずとて辭任せられたるに付、我が部の先輩にして、嚮に歐米の留學より歸朝

後義塾の教授となりたる、青木徹氏に後任を懇請して快諾を得た。

依て我が部は、六月三十日午後六時より大學部十番講堂に於て、兩部長の爲めに送迎會を開く。先づ中村幹事起つて、前部長濱野先生に感謝狀と三ツ組銀杯を贈呈する旨を報告し、且つ新部長歡迎の辭を述べ。次いで青木新部長と堀切氏の演説あり、夫れより餘興に移り、部員の茶番狂言（箱根關所の場合）、濱田、田中兩氏の尺八其他講談等ありて、一同歡を盡し、十一時頃散會した。來會者實に百二十名に餘り、近頃稀なる盛會であつた。

爾來青木氏は、四十一年迄の在任中、煩累を厭はずして能く部の爲に力を盡されたるは勿論、辭任後に於ても、或は柔道部後援會の會長として、又同會を三田柔友會と改稱せる後も、其會長として、長く柔道部と關係を絶たず。高廉なる人格と卓抜なる識見とを以つて、部員後輩を誘掖せられ、部の會合には、毎に其溫顔を現はさないことはなかつたが、昭和五年十月病を得て逝去せられたるは、後輩一同の哀惜措かざる所である。柔道部が今日の隆昌を見るに至りたるは、同氏の力與つて大なるものありと言はなければならぬ。

## (五) 山下師範の渡米

明治二十二年、始めて我が部の師範として就任せられたる山下先生は、此度米國鐵道王と稱せらるゝサミュエル・ヒル氏の招聘に應じ、遠く彼地に柔道普及の爲め渡米せらるゝことゝなつた。先生は實に十五年間一日の如く、勞苦を厭はずして我が部の爲に大に力を盡されたのであつて、親しく多くの部員を指導せられ、昔の微々たる柔道部をして、今日の隆盛を見るまでに育て上げられた其功績は、永く没すべからざるものである。先生今や我が部を去るも、三田山上に柔道を盛ならしめた如く、太平洋を隔つる異境に於て同じく其華を咲かしむることを得ば、斯道の爲に一時の別れを忍ぶも亦止

むを得ないことであつた。別離の情に堪へざる我が部は、其の行を盛ならしめんとして、九月十九日午後一時より饒別勝負を行ひ、それより送別會を開いた。(口繪参照)

饒別勝負には、雨天にも拘らず、試合者及び參觀人の集まる者三百人。主賓山下師範の外、鎌田塾長、福澤體育會長、青木新部長、森幼稚舎々長、塾員窪田文三、舊部員平野勝次郎、牧口義矩、堀切善兵衛、金澤冬三郎諸氏も列席せられた。試合は舊部員諸遊慎吉氏の審判の下に行はれ、左の十一番の取組と、五人掛等あり、中には少年時代より先生の教を受けたる有段者等も多くあることとて、先生も今渡米に際して此の勝負を見、一種の感に堪へざるもの如くであつた。

(一) 神谷新吾——高見澤猿治、双方全塾無双の小粒なり。其チヨコ／＼立廻る様實に面白く、満場大喝采、十五分の後引分。

(二) 中島重次郎——渡邊源吾、何れ劣らぬ業士なるが、是亦八分の後引分。

(三) 濱田隆一——西原久、濱田が近頃の進歩實に著しく、西原の巴投背負投共に見るべきものありしも、遂に濱田の左腰見事に功を奏す。

(四) 中野榮三郎——大藪孝一、共に／＼有望の士なりとは、山下先生の常に言はれし所なり。其惜氣なく戦ふ様實に勇ましかつた。中野大内刈にて一本取り、大藪も亦左釣込腰にて一本取り、勝負となり、中野奮然として巴投に出づれば、大藪空に飛んで中野の勝は見事。

(五) 加藤多助——木村徳太郎、一本勝負となつて木村の巴投極まる。

(六) 山田又司——薄宗太郎、山田の大内刈釣込腰極つて薄の敗。

(七) 海江田平八郎——高島一貫、共に小兵なり、海江田の大内刈少しく分ありしも、時過ぎて遂に引分。

(八) 大塚莊亮——森本利三郎、双方共業士の内の業士なれば、其立働き様實に模範的であつた。大塚先づ鋭き背負投に

て一本投げ付くれば、森本無念と立ち上るを、又も素早く背負ひ、大塚鮮かに勝を取る。

(九)盛田保三——松岡正男、松岡は名代の荒武者なれば、盛田が拂腰にて攻め立つるをうまく釣込み、大外刈にて参らせ、又も袈裟固に出でて之を破る。

(一〇)秋山孝之輔——西久保治助、先づ西久保背負投に行きしが、秋山危く残し、西久保の急ぐを秋山大外刈にて一本。

(一一)中村愛作——佐野甚之助、(初段)中村先づ跳腰に出で、佐野足拂を試むれば、中村又残して跳腰に行き、佐野が残して回る端を横掛にて攻め立つる様實に巧にして、観者爲に拍手し、茲に審判者は一本勝負を宣し、未だ何れが勝つとも知れざりしが、中村が思切つての大外刈遂に極つて勝。

後五人掛ありしが、向山は五人目大塚に破れ、五月女は四人目秋山に固められ、吉武は危く抜き、藤崎は見事に抜き通した。

向山昌治

- ○ ○ ○ ●
- 大塚 莊 亮
- 木村 德 太 郎
- 西 原 久
- 濱 田 隆 一
- 齋 藤 衡 平

吉武吉雄

- ○ ○ ○ ○
- 小 泉 浩
- 森 本 利 三 郎
- 平 賀 恒 次 郎
- 山 田 又 司
- 海 江 田 平 八 郎

五月女芳三郎

- ○ ○ ○ ●
- 秋山 孝之輔
- 大塚 莊 亮
- 平賀 恒次郎
- 薄 宗太郎
- 向山 昌治

藤崎達磨

- ○ ○ ○ ○
- 小 泉 浩
- 森 本 利 三 郎
- 西 久 保 治 助
- 平 賀 恒 次 郎
- 山 田 又 司

それより茶話會に移り、幹事中村氏は部員一同を代表して立ち、「我が部今日の隆昌を來せるは、全く先生の賜ものである。先生の去らるゝは遺憾なれども、今や先生の渡米は、我國の武士道たる柔道を歐米各國に紹介する端緒を開くものなれば、寧ろ我が部の名譽とすべきである。幸に健全にして彼の米國に柔道を扶植せられんことを望む」と述べ、其功勞に酬ゆる微志として、部員一同より金時計一個を贈呈すと報告し、次に金澤氏は卒業部員を代表し、青木氏は部長として共に懇篤なる謝辭を呈した。最後に山下先生は徐に演壇に立ち、丁寧なる答辭を述べられ、「親愛なる部員諸君と別るゝは、余の忍びざる所なり」と語られたる時には、語るものも聞くものも共に涙を呑んだ。それより茶菓を饗し、琵琶歌、講談、部員の茶番ありて興を添へた。

尙山下先生及び同夫人は信濃丸に便乗し、九月廿二日米國に向つて出帆せられた。部員一同新橋停車場若くは品川停車場に見送り、幹事及び有段者は横濱に到りて、親しく乗船の甲板上で別れを惜んだ。

## (六) 第二回京都遠征不調

昨春我柔道部は、關西に其名も高き第三高等學校に戦を挑んで交渉相調ひ、一粒選りの健兒二十餘名を嵐山の麓に派遣し、無慘にも不覺を取りて、戦士諸氏の恨涙爲めに清き加茂川の流れを増したが、仕合前彼我の交渉によりて、爾後毎年技を戦はして、一には相互の親睦を計り、又一には技術の練磨を計らんと約束であつたから、何れも皆、來るべき年を期して、歸塾後頗る熱心に腕を練り、體を鍛へてゐたのであつた。然るに今春又第二回の仕合を挑みたるに、何ぞ計らん三高よりは

貴塾の如く、仕合後彼是と惡口雜言するは、誠に男らしからざる事なり、我三高は斯る男らしからざる敵と戦ふを好

ます。

と云ふ意味の返書が來た。蓋し昨年柔道部遠征日誌に仕合の真相を寫して、之を三田評論紙上に掲載したるを謂ふのであらう。之に對して我部よりは直ちに左の意味の書面を送つた。

貴校にて應ぜざればそれ迄にて、如何ともする能はされども、此處に一言したき事あり、即ち貴校が我が挑みに應ぜざる唯一の理由とする處は、仕合後吾人が或る雜誌に其真相をさらけ出して、是を論評したるにありと察せられる。吾人が仕合の際に沈黙を守りて敢て争はなかつたのは、吾々自身が其審判者の宣告に服従すべき仕合者であつたからである。されど吾人にして其仕合の場を去りし限りは、既に仕合者にもあらず、又審判者と何等の關係もなく、吾人は一の批評家として、無私公平に其仕合を論ずる事を得る者ではなからうか。知るや知らずや我が慶應義塾は、其主義とする所、獨立、自由、自尊、而して吾々塾生は、誰に阿諛するの要もなく、全く言論の自由を有する者である。而して又如何に評言嘲罵すればとて、善きものを善しと云ひ、悪しきものを悪しと云ふに何の憚る所かある。唯々斯道に熱心なるの餘り、黙するを得ずして一言を費やしたるばかりである。若し吾人が斯る仕合を目撃しながら黙々に付し去るとせんか、ヘツピリ腰は何時迄もなほらず、審判者は何時迄も盲目たるに目醒めぬであらう。これ柔道其者の爲めに嘆かはしき事ではないか。吾人は紳士を以て任ずる者である。請ふ吾人を見るに色眼鏡を用ゆる勿れ。

と。斯くて第二回の挑戦は不調に了つたのであつた。

## (七) 第二回對早稻田大學柔道試合

霜は滿都を鎖ざし、風は稻荷山頭の老樹を掠める秋の末、雪辱戰の旗をかゝけて早稻田勢數十騎、一日三田臺に押寄せ

來り、こゝに兩大學柔道部の間に第二回の決戦が開かれた。場所は普通部新講堂の二階。(第一回は昨年六月八日に行はれ聯合ではあつたが塾方の大勝となつたのである。)

この日零時四十分、青木部長一場の挨拶をなし、兩軍の戦士互に一揖し、拍手喝采裡に戦端は開かれた。その戦蹟左の如し。

『吾軍の先峰宮部氏は、先づ日無級者紅白勝負に於て、強敵數人を投げ抜きて武勳を立てたる新進の士、勢込んで攻め來る早稻田の驍將小林氏を大外刈に薙ぎ倒す。續いて來る横溝氏、亦ハイカラの浮名と共に屍を品海の波に流させ給へば、次なる大久保氏、島川氏、藤田氏、共に此の勢に辟易して打倒る。中村氏ウヌと許りに馳せ向へば、宮部氏得意の巻込を以て、難なく之を巻き倒し、續く小野氏をも又々大外刈に薙ぎ伏せつ。八人目なる中村氏、こは容易ならずと奮戦して漸く宮部氏を撃退す。(八人目とあれども後記勝負表には九人目となれり、孰れが正しきか暫く原文のまゝとす。)宮部氏今は屍を戦場に曝すと雖、敵七名を斬つて棄てたる此日の働、褒めぬ人こそ無かりけり。吾軍の二陣瀧間氏は、宮部一人に手柄をさせずと奮勇日頃に十倍す。足拂にて中村氏を倒せしも、藤田氏の巴投に倒れ、林田氏亦内股にて破らる。第四陣なる新井氏、奮戦數刻の後、又もや内股に倒るれば、橋本氏は奮激一番遂に敵を大外刈に打止めぬ。宇佐美氏襟絞を以て橋本を倒せば、山口氏更に喉絞を以て其髻を復するなど、戦益々佳境に進む。早稻田方の石井氏、中島氏と勝負決せずして互に退き、吾軍の濱田氏、増井氏の爲に頸絞にて首を搔かれしも、近藤氏は御得意の背負投にて之を破り。高野氏に當りて破らる。神吉氏小兵を以て能く大敵を惱まし、遂に大外刈に高野氏を倒す。次なる濱中氏、亦頗る大兵にして、而も拂腰中々に猛烈を極め、觀客をして手に汗を握らしむ。されど神吉少しも恐れず、奮戦力闘又々大外刈にて分を取りしも、十五分間の苦戦後、遂に押込にて退きは是非もなき次第なり。西原氏亦小兵なれども、多年手練の早業美事に功を奏して、腰投にて濱中氏を破り、矢野氏の跳腰に倒る。瀬川氏思ひの外に脆かりしも、齋藤氏鮮やかに其髻を復して福氏に破



られ、續いて出でたる上杉氏と福氏との勝負こそ、いとも興あるものにてありけり。先づ福氏の武者振如何にと見れば、満面の鬚髯蓬々として艾の如く、赤き半股引は黒き膚と映じて異觀云ふばかりなし。之に手向ふ上杉氏、亦其名を知られし愛嬌者、獨特の大頭を振り立て、攻め附くれば、福氏も亦之に應じ、頭の突き合に満場の觀客思はずどよめき渡りぬ。次は柳氏、衰へたりと雖も流石に昔取つたる杵づかに渾身の蠻勇を鼓して攻め立つれば、石谷氏も能く防ぎて引分。木村氏と藤田氏は、共に名だゝる手取りなり。木村は大外刈、横捨身にて痛手を敵に負はすれば、敵も亦腰業捨身業を以て之に酬ひ、遂に勝敗なかりけり。加藤氏巴投にて水沼氏に破られ、小倉氏内股返しに其驪を報す。上遠野氏出でしも引分となる。次なる中野氏米本氏、亦激戰數合にして相退くや、義塾方新進の猛者大藪氏は、裏投を以て見事に大多和氏を破り、谷川氏亦當り難く見えけるが、大外刈返にて危く大藪を撃退す。島氏、谷川氏を屠りて久米氏に破られ、盛田氏背負投にて又々戰場の露と消え失せたり。黒江氏好き敵御座んなれとばかり、奮戰數刻、互に秘術を盡せしが、足拂にて切つて落す。鈴木氏内股の重傷に倒れ、筑波氏亦大外刈に薙ぎ伏せらる。水谷氏出で、漸く此の剛敵を退けしも、薄氏の大外刈返にて討死を遂ぐ。米澤氏四方固に薄氏を捕攫せしも、高島氏見事に内股を以つて其驪を復せしが、元吉氏の剛勇に敵し得ず、再び四方固にて陥落す。西岡氏ウヌとばかりに勇み出で、瞬く間に元吉等三人を振ち伏せければ、次いで現はれたるは初段の候補者桑原氏、業も手並も知る人ぞ知る。此時西岡少しもひるまず、壓し倒し壓し重つて其首を搔かんとすれば桑原巧に逃げてさは爲せず、さらば手取にせんと、西岡獨特の邯鄲夢の枕的押込に行けば、桑原氏堅く守つて少しも動かす、斯くては果てじと、審判官は二人に立上つて勝負を命ずれば、其聲未だ終らざるに桑原氏得意の背負投見事に大の男を投げ附けたり。桑原氏得意満面昂然吾軍に向つて大手を擴げ、「サーコイ來れ」と疾呼して森本氏を背負投にて倒し、吉田氏を體落に掛け、大塚氏亦體落と背負投とに哀れ最後を遂げぬ。此の有様に奮激せる松岡氏は、用心堅固に且つ防ぎ且つ攻めて、遂に大外刈返に功名を擧ぐ。巖谷氏代つて松岡氏を抜きしも、海江田氏の翻弄する所となる。續いて矢野氏横

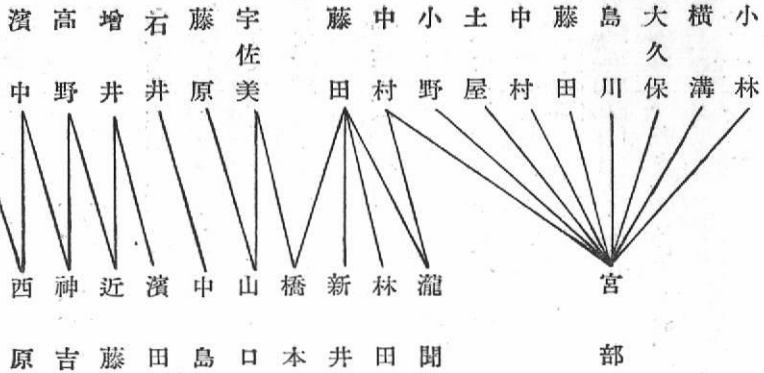
捨身に西久保氏を破りしも、平賀氏の體落に花々敷最後を遂げ、佐藤氏押へ込んで平賀氏を降し、拂腰に福田氏を撃退せしに、濱田氏出で、之を破る。森田氏大内刈に濱田氏を倒せば、堀切氏新たに之に向ふ。森田氏其前袋をむんづと取り、えいやと引けば、堀切氏はナンノとばかりに之を蹴落す。森田氏「恐ろしや脚の力、我腕爲めに挫けん」といへば、堀切氏は「首の骨こそ強けれ」とも何とも云はず、共に左右に引き退く。

『桑原氏以下敵の勇士は、其後何れも初段の名譽を荷ふに至りしが、此時迄敵の初段は残れる篠原以下の五勇士なりしに、味方は尙も無段者を餘すこと三名なりければ、秋山氏勇躍して篠原氏に向ふ。篠原氏得意の跳腰をもて、微塵になれと攻め立つるも、秋山氏亦裏投の秘術を出して之を防ぎ、激戦數刻勝負決せず。次いで出でたる山田氏、足拂の一撃に濱田氏を撃退すれば、早稻田に名高き剛の者手島氏愈々茲に現はれたり。巴投にてスツポリ山田氏を倒せしも、油斷は大敵、小泉氏飛鳥の如くに飛び込んでアツといふ間に腕挫にて之を破る。三輪氏出で、送足拂に小泉氏を破れば、味方よりも黒帯の武者振勇ましき吉武氏打て出で、攻め立て、戦ふ程に、吉武氏の内股美事に極まつて三輪氏を破る。餘すは敵の大將唯一騎、河野氏今は是迄とや思ひけん、獅子奮迅の勢凄まじく攻め來るも、吉武氏亦味方の重望を荷ふて此處を先途と戦ふ程に、如何なる隙をや見出しけん、得意の内股風を拂つて出づるよと見る間に、河野氏の首級は高くかゝげられぬ。紅旗長へに地に委して、白旗は三田臺に翻瀾たり、歡呼の聲は新講堂を振はしつ。』(口繪参照)

(勝負表次頁に在り—早軍二名不參。)

紅軍(早稻田)

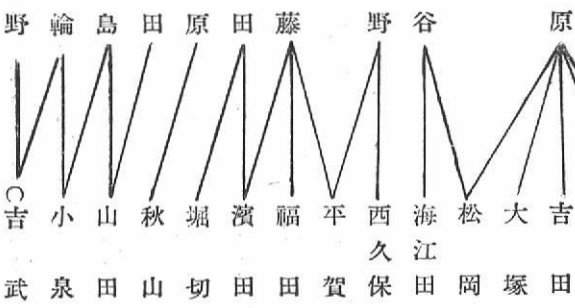
白軍(義塾)



七 明治三十六年史



河大三副手濱篠森佐矢巖桑  
將將將



◎藤大 中副五 佐  
將將將月 野  
崎村女

107

## (八) 雜記

## 島津理左衛門氏の計

久しく幹事として盡されたる大學部三年生島津理左衛門君は、二月上旬より腸窒扶斯に罹り、傳染病研究所に於て療養中なりしが、三月一日終に吾等と幽明界を隔つるに至つた。行年正に二十五。君は平生體極めて頑健、加之意志頗る強固にして、前途最も囑望せられたる有爲の青年なりしに、不幸夭折せられたるは、本部の哀悼に堪へざる所であつた。

## 卒業生送別會

幹事初段金澤、同堀切兩氏及び部員小寺氏此年卒業せらるゝに付、三月二十四日午後四時、先づ記念の爲に、煉瓦講堂前に於て一同撮影をなし、續いて道場に於て送別會を開く。幹事中村氏立つて開會を宣し、送別の辭を述べ、次に山下師範は柔道部より三氏の功勞に酬いる聊かのしるしとして、感謝狀及び記念章木盃を喝采の裡に授けられた。それより各總代の送別の辭あり、後一同晚餐を共にし、續いて餘興に移る。篠田氏の薩摩琵琶、濱田氏の尺八、松岡、荻原兩氏の劍舞等、平生眞面目なる人々の隱藝なれば、一層の興趣あり、殊に茶番を演じたる吉堀氏の植木屋、吉武氏の藪醫者、藤崎氏の巡查等は、各々其柄にはまりて、殊更に見映えがあつた。出席者六十餘名。(口繪參照)

## 幹事更迭

金澤、堀切兩氏の卒業と、島津氏の不幸とにて幹事に缺員を生じたるに依り、之を補ふに吉武吉雄、小泉浩及び盛田保

三の三氏の新任を見るに至つた。

### 自修會の設立

部員の品性を高め、互に相戒飭せんとの目的を以て、幼年組に自修會なるものが組織され、其幹事として大塚、西原、小野、濱田(隆)の四氏が就任せられた。

### 普通部五年對三四年紅白勝負

『六月十一日午後二時より、普通部五年軍に對する三、四年聯合軍との間に紅白勝負が戦はれた。五年級方は紅軍、三四年方は白軍に陣取つた。白軍の方は殆んど幼年組で、紅軍は殆んど成年組の大兵揃であつたから、まるで幼年と成年の勝負ともいふべき觀があつた。而も紅軍には三級が二人もあるに、白軍には三級が御大將只一人であつた。其割に白軍の上出来であつたのは、全く幼年組の連中の業が華々しかつた爲めであつた。

『兩軍の戰士は各二十名宛で、審判官は初段中村愛作氏。相方禮を終つて、歡呼の内に出たのが、紅軍からは和田貞造とて眞黒の中兵、白軍からは増田と申す軍中第一の大男である。二三分間も揉合つたが、和田の大外刈見事に極つて、増田は無念の一語を残して落命した。血眼になつて立ち上つたのは、白軍の岩田である。五年の老耄共目に物見せんと云ふ勢で、和田を振飛ばさうとしたが、和田も必死となつてヘツピリ腰、只々守るのみで遂に引分。次は紅軍の水谷に白軍の勝木、双方共大兵で、力は有つたが是ぞと云ふ業もなく、空しく引分。代つて紅軍の岩崎に白軍の松永、岩崎はランニングのチャンピオンとして人に知られ、松永は綽名を猿と云はれてゐる通り、體は小さし、業は捷く、岩崎が體と力を頼りに振廻はさうとすれど、此方は幼年六級紫帯の手取なれば、流星の岩崎ランニングも施すに術なかりしと見えて、遂に又

引分となつた。次は紅軍の山崎に白軍の高見澤、高見澤は幼年組の豪の者、山崎は日本橋邊の道場で盛に稽古をやつて居て、柔道は御得意だとの事、双方三四分間も戦つたが、高見澤は遂に襟絞で往生した。白軍より我こそは、豆州熱海の住人、本年取つて十四歳、石渡泰三郎とは申すなり、いで高見澤が仇打ちくれん、山崎とやらそこ動くなと云ふが早いか、見事日本橋の先生を釣込足にて投げつけた。見る人扱も出かしたりくと賞めそやす中、紅軍より現はれしは、身の丈六尺に近い關と云ふ辨慶氣取の大男、汝石渡とやら、牛若を氣取りて味方を惱ますとは小癪なりと、力まかせの跳腰で投げ飛ばした。續く白軍の遠口、山中、古橋、川田をば或は跳腰或は巴投で撫斬りにしたる關が勢、實に勇ましくして當るべからずであつた。此時紅軍の殘兵十六人に對して、白軍は僅に十人である。白軍より現はれたポートマンの安川鴻藏、味方の不利が齒痒くてたまらぬ面構へ、關とやら如何に暴るゝも、我れ出でたる上は覺悟しろと云はぬばかりに立合ひて、荒れ廻る敵を見ん事横捨身で止めを刺した。紅軍の加賀美は關の仇も取らずに遂に引分。次は紅軍の青木と白軍の村上、村上は幼年四級の豪の者、青木の頑張るを事ともせず、足拂で見事に打取り、續く坂田の力と體にまかせて一生懸命に頑張るを、膝車で八分迄取つたまゝ引分となつたのは惜かつた。紅軍の植村に白軍の渡邊源吾、植村が大の體も美事源吾の背負投げに命を落した。次に出たのは紅軍の大野、筋骨たくましくして身の丈六尺に垂んとする好丈夫である。小兵の渡邊が疲れたのに乗じて、袈裟に固めた工合は、正に體の効めがあつた所である。渡邊の死を見て出でたる瀬良是助、是亦幼年組のバリ／＼電光石火の早業士である。されば大野の大力も何の爲す所もなく、自護體で防戦したが、瀬良が飛込んだので大腰鮮かに極つて、大野が目を廻したのは大笑であつた。次なるは宮澤と申して、體は大きいが終始守勢を取り、小さき瀬良と引分を取れば、白軍より現れたのは荒神様と云はるゝ成年四級の取手神吉英三である。紅軍よりは無級者の大將にて、その名も岩の如き岩淵、双方暫く揉合つたが、神吉は過つて足を痛めたに乘じ、岩淵が此處ぞと附け込んだのも亦一興であつたが、遂に大外刈で岩淵は成佛した。之に代つて成年四級の島米八、體力共に拔群の豪の者、岩の淵迄蹴

破つた荒神吉も、なか／＼島をば倒し兼ね、遂に引分とはなつた。次は當日第一の好取組、紅軍一の小兵幼年四級の小野秀一と、白軍の中島重次郎、之も同じく幼年四級で早業士の評判高き人、虚々實々互に秘術を盡して戦ふ様は、實に小氣味好き二人であつた。中にも中島の背負投に小野の巴投、觀客の拍手喝采暫し止まなかつたが、十分の後引分となつたのは力の入つた取組であつた。其後を次いで名乗り合ひたるは白軍の中野に紅軍の菅井、菅井は左利きの豪の者、中野も近頃旭日昇天の勇士、暫しが互に機を窺つたが、中野が思ひきつた外捲込殆んど極つて九分を取り、又もや横捨身に中野の勝は素的であつた。續く紅軍の橋本は、名古屋の産にして、千變萬化實に早業の男である。橋本は大事を取つて戦つたが、中野の油斷に附込んで裸絞の一本は大出來であつた。中野の死を見て飛び出したるは濱田の隆一なり、汝玉次郎とやら、我黨の中野を絞め付けるとは何事ぞ、歳と體とはいざ知らず、業に於ては何條汝に劣るべきと、一氣に寄り進んだ所を、危くも橋本の大外刈に分を取られたが、濱田は機を見て出足を掃ひ、物の見事に取つて投ぐ。扱てその次は紅軍中黒大將の聞へある眞黒の加藤多助、流石の濱田も少しく固まつたと見へ、惜しい所で加藤の足掃に破られた。白軍は副將齋藤衡平、體こそ小さいけれど、業に於ては天晴れの副將軍、されど此時紅軍を見渡せば、まだ豪の者四人も残り、歳若き白軍の副將は少しく氣が退けたか、遂に加藤の黒い足拂で倒された。残るは白軍の總大將平賀恒次郎である。體格といひ技術といひ、大將の貫録を充分に具へた剛の者、雜兵弱將四人位は何のその、いざ來い來れと思ひ切つて立ち上つたのは、實に勇ましくし武者振りであつた。二人までも薙ぎ倒して得意満面の加藤をば、見事な體落に目から火が出る程投げつけると、紅軍からは西久保治助とて、大塚大將をも凌ぐ程の背負投の名人、敵の大將もこれでぞと、スツと入つた背負投に、平賀の體は西久保が肩を中心に、半徑を畫いてどつと落ちるは落ちたれど、さすがは平賀輕くも體を躲して免れた。されど平賀は、己の責任の重大なるを思ふてか、構へは益々固くなり、又もや西久保に背負はれて、哀れ白軍の御大將も遂に戦場の露と消え果てた。紅軍の大副兩將は、戦はずして此の勝利を得たれば、紅軍萬歳の聲暫し天地を揺がした。

時に午後五時半。』（白山生）

### 一 泊遠足會

茶話會等の催に飽きたる部員は、十一月二十二日武州高尾山に一泊遠足會を試みた。會する者馬、牛、鵝鳥、ポインター、臘納等の動物より、或は達磨大師、閻魔大王といふが如き嚴めしき名の外に、ラケット、鍋、べら、弱兵衛、凸助、ちん等の渾名を有する勇士の面々二十有餘人である。その扮装はと見れば、紳士の服あり、學生の服あり、或は百姓の姿せるあり、又履物に靴あり、下駄あり、草履もありといふが如く、奇々妙々の寄り集まりであつた。早朝道場を出發して、信濃町より汽車に乗り、行く／＼ニツクネームの名指し遊戯に、疾呼歡聲相繼ぎ、室内爲に破れんばかりの喧騒を極めて八王子町に着。一同先づ蕎麥屋に入りて有りつたけのそばを平げ、午後一時少し前に愈々登山に向ふ。途に平賀、齋藤、藤慧海の二氏に遇ふ。此の二氏は先發隊として、東京を未明に出發し、此處迄歩き通したる勇者であつた。二里の行程も難なく過ぎて、早や高尾山の麓に到着した。

行くこと數町にして道漸く峻しく、老杉繁茂して晝尙暗き幽邃の境を抜け、中腹に於て武藏野の秋色を賞し、頂上を極めて満山の紅葉に無限の情趣を拘した。聽て高尾神社に拜禮し、事務所に入り、豫て約束の一室に案内せられて、一行は其夜二十餘疊の廣間に勞を休めることとなつた。

されど一行の荒武者共は、ただ慰安を貪る徒にあらず、何がな興はなきものかと頭を捻つた末、こゝに幼年者の爲にとて、試膽會を開くこととなつた。これに選ばれたるは、鍋、ポインター、弱兵衛、ラケット、べら、ちん、凸助の諸士であつた。而もいよく抽籤でその順番を決めることとなりしに、疲れや出でしか、甘いものなら吾れ先きにと手を出す連中も、この時ばかりは互に尻込みして滑稽百出、膽の試練に山道に出掛けたるは、僅かに二三名に過ぎなかつた。それ



より閻魔氏の講談二三ありて、一同華胥の國に入る。

明れば二十三日の神嘗祭、今朝は高尾の食ひ仕舞ひよと、食ひ氣一方、朝から鯨腹詰め込んだ連中もあつた。十一時堂宇を辭し、下る途中は雨中の坂道、泥土に足を取られて尻餅搦く者もあつた。人里離れた深山の瀧に、狂婦の水に打たれてその病を治すといふ小屋を覗き、狂人にあらざる一行の中數名の者も、流に浴して後武藏野に出で、一時に淺川驛を發して信濃町に下車し、歸塾の上散じたるは五時過ぎであつた。

## 部員派遣

○十月二十五日の午前、講道館月次勝負に秋山、福田兩二級出場、秋山の腰投大内刈何時も乍ら見事にて、二人まで倒したが三人目に敗れ、福田は此頃得意の背負投で二本まで取つたが、二人目の大兵には無念にも敗れた。

○同日の午後、外國語學校大會に派遣された大藪四級は難なく相手を押へて勝、薄三級は足拂にて一本を占めたが、遂に敗戦に了り、次に大塚二級は獨特の鮮やかな背負投にて續けざまに二本取り、福田二級は引分に了つたが、其働き振りは參觀者の大なる喝采を博した。又中村初段は苦もなく敵を退却せしめた。

○十一月八日、藤崎初段附屬中學に出戦。

○同十五日平賀二級中野四級の高等師範に於ける成績は、前者は惜くも敗れ、後者は引分に了つたが、初めての派遣としては其取口感服の外なかつた。

○十一月二十二日橋本玉次郎、神吉英三、上杉彌一郎、木村徳太郎、大塚莊亮の五氏を早稻田大學柔道大會に派遣せしが皆強敵に當り乍ら見事なる働き振りであつた。

○十二月六日、齋藤衛平、秋山孝之輔の二氏を帝國大學大會へ派遣、齋藤は講道館幼年三級森氏と試合ひ、双方各一本を

取り、後齋藤氏八分を取りしも引分となる。又秋山氏は一高の驍將山上榮一氏と取組み、常に攻勢に出でしが是れ亦惜い所で引分となつた。福田龍、遠口直次郎の二氏は同日飛入りをなし、福田は帝大の森氏と立合ひ、一本八分まで取りて引分け、遠口は講道館幼年四級の強敵と戦ひ、見事に押へ込んで勝を得たるは、塾の幼年五級として適れの働きであつた。

○十二月十三日瀬川巖、海江田平八郎、吉武吉雄の四氏を美術學校大會へ派遣、瀬川は講道館甲組渡邊氏と試合ひ、敵に名を成さしめ、海江田は高師無段者の大將茨木氏と各々一勝一敗の後、將に引分といふ所であつたが、體力の差は如何ともする能はず、遂に敵に勝を譲りたるは残念であつた。尙吉武は對手の初段早大の出口剛氏遅刻せし爲め遂に不戦、空しく引上げた。

## 進級一括

○二月、寒稽古後の昇進

幼年四級へ 濱田隆一、瀬良是助、中島重次郎、渡邊源吾、小野秀一、笹尾眞

四級へ 篠田信二、中野榮三郎、神吉英三、齋藤衛平

三級へ 平賀恒次郎、森本利三郎

○講道館鏡開式に於て

初段へ 本多親宗、吉武吉雄

○六月の進級者

幼年二級へ 大塚莊亮

幼年一級へ 向山昌治

三級へ 加藤多助、木村徳太郎、上杉彌一郎、薄宗太郎、黒江潮

二級へ 福田龍、森本利三郎、平賀恒次郎、西久保治助

## 八 明治三十七年史

### (一) 内田先生の師範就任

昨夏山下先生渡米以後、我部は暫く無師範の状態であつたが、其内に偶々四段の内田良平氏が露西亞より歸來して、芝の山内に居られた。同氏の東亞大陸に於ける國土的活動と柔道界に於ける名聲とは、青年の心を動かさずには措かなかつた。豫てより後任の師範たるべき人物を物色中であつた幹事等は、乃ち白羽の矢を同氏の上に立て、一夕其寓居を訪問して、柔道部の現状を述べ、同志の希望を訴へて、師範に就任せられんことを懇望した。當時氏は黒龍會々長として多忙の身なるにも拘らず之を快諾せられたのは、部員一同の同慶に堪へざる所であつた。我部と内田氏との關係は、必らずしも之を以つて初めなりとはしない。氏は明治二十五年東京に出て豊岡町に居られた時、學籍は塾に置かなかつたが、塾生たりし友人と連れ立ちて幼稚舎道場に通ひ、其處で始めて講道館柔道を稽古したのである。

内田先生は福岡の人、彼の玄洋社に屬して、青年時代より夙に國土的な氣概に富んでゐた。十九歳笈を負うて東都に來る前、既に單獨にて郷里に道場を設け、之を天真館と稱し、同志を集めて自剛天真流を廣めた。上京後は専ら露語の研究